

日本の子育てと地域社会～仮親制度としつけ～
A study of Japanese bringing a children and regional society
～System of social parents and discipline～

1K07B232-6

指導教員 主査 寒川恒夫 先生

米村 百恵

副査 早田 幸 先生

【序論】

近年、我が国では、少子高齢化対策として、いたる所で地域全体における子育てネットワークの充実がさげばれている。しかし、そのような流れがあるにも関わらず、核家族化などによる地域社会との関係の希薄化は、依然深刻なものであり、母親の子育てを孤立させ、大きな負担感を招いたとされている。本論文は、日本に伝統的に行われてきた子育て文化を再考することで、子育てにおける人々の知恵を学ぶと同時に、現代社会の子育て文化を改めて見直すきっかけとなるものである。

【第1章】

ここでは、日本の特徴的な子育て文化である、「仮親制度」に注目し、この風習によって、その子どもを取り巻く人々の関係が、どのようにしてつくられていったのかをみていく。ちなみに、この仮親制度とは、子どもが無事に成長することを願い、実の親とは別に、擬制的な親子関係を結ぶしくみのことである。まず、出生～幼年期では、「帯の親：オビノオヤ／取上げ親：トリアゲオヤ／乳付け親：チツケオヤ／抱き親：ダキオヤ／名付け親：ナツケオヤ／拾い親：ヒロイオヤ／守り親：モリオヤ／養い親：ヤシナイオヤ」の8つの事例を取りあげる。次に、成年期以降では、「烏帽子親：エボシオヤ／鉄漿親：カネオヤ／仲人親：ナコウドオヤ／職親：シヨクオヤ／草鞋親：ワラジオヤ」の5つの事例を取りあげる。仮親制度には、親が子どもの成長を願う思いの表れとして、呪術的な要素と社会的な要素の2つの意味合いをみる事ができた。

【第2章】

次に、この章では、日本のムラ社会における子どもの「しつけ」に注目した。しつけとは、人間として社会に生きていくための、基本的な生活習慣を家庭で身につけさせることである。かつて、我が国では、子どもを一人前の大人にすることが、しつけの目標とされてきた。その文化の中で、家族やムラ社会のそれぞれが、しつけの担い手として、どのように役割を果たしながら、子どもの成長を支えてきたかを、「母親」「祖父母の子守り」「親との労働」「ムラ社会」の4つの視点からみていく。

【第3章】

さいごに、この章では、現代の子育ての取り組みに注目し、か

つての日本社会で築かれてきた、地域社会との関わりの中での、子育てのしくみが生かされる方策について検討する。まず、1つ目には、父親からの視点として、2010年の改正育児・介護休業法の施行に伴って始まった、「イクメンプロジェクト」を取りあげる。「イクメン」とは、育児を楽しむ男性のことをさす。もともと、父親の育児をサポートするためにはじめた、ひとりの父親の行動が、国としての取り組みへ影響を与えたことはたいへん興味深い。2つ目は、母親の視点から、子育て環境の改善に取り組む子育て相互支援活動「ほっと村」の取り組みを紹介する。これは、筆者が地域活動に参加する中で出会ったものである。この2つの事例から、よりよい子育て文化を築こうとする取り組みの意義を見出すと同時に、かつての日本社会から受け継がれてきた地域全体で子育てをする文化との相違を考察する。

【結論】

かつての日本社会では、親の子どもの成長を願う気持ちが、仮親というしくみや、しつけの役割分担となって表れ、人と人のつながりを生みだし、また、地域とのつながりをつくり出してきた。われわれは、子どもの存在によって、地域社会との関係性を保ってきたのである。今日、核家族化や少子化など、現代社会の抱える課題は山積みである。しかし、かつての日本社会を支えてきた、子育ての知恵により、これからの子育て環境は、変えられるのではないだろうか。われわれは、時代の変化とともに成長しつつも、かつての日本社会のあり方から知恵を受け、その文化を生かしていかなければならない。